

意味の理念性

Idealität der Bedeutung

矢 島 忠 夫*

表現の意味と知覚の意味

フッサールにとって<Bedeutung>と<Sinn>とは、同義語である。だが、同時に異義語でもある。

この同一性と差異を看過するかぎり、フッサールの意味論、とくに「意味の理念性」をめぐるあらゆる議論は、実りなきものとなろう。

<Sinn>という語は、それが「表現（Ausdruck）の意味（Sinn）」を意味するのであれば、<Bedeutung>と同義語である。

しかし、その語が作用の統握意味（Auffassungssinn）＝作用の資料（Materie）を意味するのであれば、<Bedeutung>と同義語ではない。

あらゆる作用（志向的体験）は、その抽象的契機として資料と性質を持つ。両契機の統一も、具体的作用の抽象的契機にすぎない。しかし、必要不可欠な、したがって本質的な成素であるがゆえに、作用の「志向的本質」と呼ばれる。その作用が意味作用であるとき、その志向的本質はとくに「意味的本質（bedeutungsmäßiges Wesen）」と呼ばれる。

表現の意味（Bedeutung）は、意味作用の抽象的契機たる意味の本質の抽象によって、しかも単なる「注意」「分離」という意味での抽象ではなく、普遍性意識としての理念化的抽象によって成立する理念的単一体である。

これに対して、知覚の意味（Wahrnehmungssinn）は、知覚作用の統握意味＝資料である。

以下の『イデーノⅠ』の記述も、上で略述された『論研』の主張を否定するものではない。

《本来、これらの語〔Bedeuten, Bedeutung〕は、言語的領野、「表現する（Ausdrücken）」の領野にのみ関係する。しかし、これらの語の意味を拡張し、そのつど適当に限定を加えることは、どうやら避けがたいことでもあり、認識の重大な進歩でもある。こうすることによって、それは或る仕方でもエシス・ノエマの全領野に、それゆえすべての作用に——たとえこの時それらが、表現する作用とからみあっているといまいと——適用される。またそうであればこそわれわれは、あらゆる志向的体験において絶えず「意味（Sinn）」——実際、一般的には「Bedeutung」と等価なものとして使われている語——を口にしていたのである。混乱を避けるために、われわれはもとからの概念だけにとくに BEDEUTUNG という語を、しかも「論理的」あるいは「表現する」BEDEUTUNG という複雑な言い方で使いたいと思う。SINN という語は従来同様今後も、より包括的な広い範囲で使うことにしよう。》（Ideen I, s. 304）

<Bedeuten>と<Bedeutung>の関係は、ノエシス・ノエマ関係という一般的視点から見られている。しかしそれは、包括的な意味での<Sinn>に対して、<Bedeutung>の特殊な意味を限定するためである。ここでの「拡張」は同時に「限定」である。<Sinn>が拡張され、<Bedeutung>が限定される。しかもこの拡張は、既に『論研』で、萌芽として『算術の哲学』でなされていたのであって、『イデーノⅠ』ではない。（ibid., F. T. L., S. 141）

『論研』において理念性が要求されていたのは<Bedeutung>一般であって<Sinn>一般ではない。《二つの表現は同じ意味を有しながら、異なる対象関係を有する場合もありうる》（L. U. II/I, S. 48）が、《同じ資料が異なる対象関係を与えることは決してありえない。》（ibid., S. 416）ある表現が、意味を「変えずに」異なる対象関係を持ちうるのはその普遍性のゆえであるが、「異なる」対象関係を持ちうるのは、そのつどの意味作用とその資料（統握意味）ないし意味の本質の個別性のゆえである。《意味の動揺はもともと

意味作用の動揺」(ibid., S. 91)であり、統握意味の動揺である。

曖昧な意味と精密な意味

形相学としての現象学は、個体については何事も語りえない。(Ideen I, S. 172)とはいえ、個体は、単に「これが-そこに」(Dies-da!)という仕方での存在が事実的に確認されるのにすぎないものではない。いかなる「このもの」(Dies-da)も、その実質の本質要素を持っている。《その実質の本質が具体者であるこのものが、個体と呼ばれる。》(ibid., S. 36) 具体者とは、絶対に独立な本質である。最低種差、形相的単独体のみが独立の本質でありうる。一般的な本質は特殊な本質の中に直接ないし間接的に「含まれて」いるから、上位の種や類は、《原理上すべて非独立の本質》である。ある類が具体的な類と呼ばれても、それ自身が具体者なのではなく、その下に具体者を持つことを意味するにすぎない。それゆえ、「含まれる」という言葉の二重の意味を区別しなければならない。ある本質がより上位のスペチエスなしいし類に下すること(Subordination)と、個体を、あるいは一般にこのものをある本質に(最低のスペチエスから最高類に至るまで)包摂すること(Subsumption)を混同してはならない。(ibid., S. 33) 外延的に含まれるものは、それゆえにその独立性を犯されることはない。逆に、外延的に含むものは内包的に含まれる非独立的なものである。この意味で、個体を包摂する本質は個体に含まれる非独立的内容である。それが独立であることは、それを含むいかなる種差をも自己の下に持たないことを意味するにすぎない。厳密には、個体のみが真の具体者である。たしかに個体は、「このもの」がその本質との関連に置かれたときにのみ個体と呼ばれうるものであり、その意味で、個体は本質を「持つ」が、本質「である」のではない。つまり、個体の本質が何であるかは語りうるとしても、真の具体者、無限なものとしての個体が何「である」かは語りえない。

形相的単独体に対して、現象学はいかなる態度をとるだろうか。現象学の逸するの「個体化」だけであり、本質内実の全体は形相的意識にまで高めうる、と語りながら、すぐさま次のことが言われる。《われわれの記述的領野では、形相的単独体の一義的規定については何事も語りえない》《このように流れゆくあれこれの具体者の術語的固定化については考えることができない。》(ibid., S. 172) 様々な次元へ向けて流れゆく流動することが意識一般の特性であるかぎり、形相的具體者の概念的に精密な固定は問題にならない。記述的概念が曖昧であることは必然的なのである。しかし、《スペチエス性のより高位の本質においては事情がまったく異なる》(ibid.) によえに、記述的形相学としての現象学の可能性はその基礎を持つ。すなわち《これら〔より高位の諸本質〕は、確固とした仕方では区別し、その同一性を保持し、厳密に概念的に把握し、同様にそれらを構成する諸本質へと分析することができる。それゆえ、これらの本質にとっては、包括的な学的記述という課題を立てることは十分意味のあることである。》(ibid.) なぜなら、体系的な帰納的手続き、すなわち普遍性の階梯を一步一步よじのぼってゆくことが方法論として要請されるという意味で、高位のものが下位のものに依存することは決してない、ということが類的本質把握の本性だからである。《さもなければ、形相的単独体の流動性が類に伝染し、これらの類の記述の厳密性が、不精密性によって排除されることになるだろう。》(Ricoeur, p. 240, n. 2. cf. p. 238. n. 1)

表現の意味のスペチエスの同一性を語る『論研』は、同時に、流動する形相的単独体の曖昧性のゆえに曖昧である表現についても、すでに十分考慮をはらっていた。意味(Bedeutung)の理念性が、曖昧な流動的表現への配慮にもかかわらず主張されていたことを忘れてはならない。

《日常生活における大部分の表現、たとえば樹木と灌木、動物と植物などは》《それが使用されるあらゆる場合に同一であるような意味内容をもっていない》曖昧な表現である。なぜなら、それらは《知覚や経験に基づいて生じる類型的諸性格》によってその意味を定めているために、《それら諸類型的流動的移行(すなわちそれよりも更に上位の類の内部での)によって、流動的な表現にならざるをえない》(L. U. II/L. S. 88)からである。表現には、意味が、主観や状況によって変動する表現と、その意味が一切の動揺を免れている客観的で確定的な表現がある。もし《一切の動揺を全て免れているというこのことを極めて厳密に受け取るとすれば、この後者に属するのは精密な表現のみである》(ibid., S. 89) ことになる。事実的な語義の動揺をこのように承認したうえで はじめて、《これら重大な意味の動揺の諸事実が、意味を理念的(したがって固定的な)単一体と解するわれわれの解釈を揺り動かすかどうか、あるいはわれわれの解釈の普遍性を制約

するかどうか」(ibid.)と問われていたのである。意味の理念性は『イデーン I』において初めて脅かされたのではなく、意味の動揺という事実との対決によって獲得されたのである。『論研』におけるこの対決がどのようになされていたのかを見ることにしよう。

何よりもまず、客観的表現の意味と主観的表現の意味との間には、何ら本質的な相違が存立していないことが確認される。主観的な表現がそのつどの状況に応じて思念しているその意味も、〈Bedeutung〉であるかぎりやはり理念的単一体なのであって、〈この表現に瞬間的に帰属する志向を同一のものとして確保している場合には〉(ibid., S. 90), 客観的な精密な表現の意味となりうる。このことは、〈客観的理性の無限性〉を、つまり〈それ自身で確定しているものは、客観的に規定されるはずであり、客観的に規定されるものは、理念的に言えば、確定された語義のなかで表現される〉(ibid.)ことを意味する。とはいえ、曖昧な主観的表現をすべて排除し、精密な客観的表現のみからなる理想言語の構築がめざされているわけではない。〈そうした試みはすべて明らかに徒勞である。〉(ibid., S. 91)それが徒勞であるのは、「客観的理性の無限界性」が否認されるからではなく、まさにそれが確認されるからである。理念的無限性のゆえに、事実的不可能性が主張されているのである。主観的表現にそのつど瞬間的に帰属する意味志向が思念している意味は、それぞれ理念的単一体であり、それら無数の意味に対応する無限に多くの一義的表現を与えることは、原理上可能である。いずれにせよ、〈瞬間的に帰属する意味志向を同一のものとして確保する〉という条件が不可欠である。異なる意味志向が異なる意味を思念していたとしても不思議はない。厳密に言えば、意味志向が異なるならば、語としては同一であってもその語は異なる表現だというべきである。語としての同一性の背後に、表現としての差異性の可能性を承認するからこそ、同じ語が果して同一の表現であるか(同一の意味を持つか)どうか常に気づかわれるのである。そして、このような気づかいは、意味を理念的単一体と考えないかぎり、無益である。

表現と表現されるもの

表現の意味の理念性が表現されるものの非理念性によって脅かされ、汚染されると考えられるのは、表現の「非生産性」と、表現されるものに対する「反映」関係とについての、ある種の解釈を前提するからである。

〈「表現」とは、すべての〈Sinn〉(ノエマの「核」)にみずからを順応させ、それ〔Sinn〕を「ロゴス」、「概念的なもの」、それゆえ「普遍的なもの」の国へと高める、ある注目すべき形式である。〉(Ideen I, S. 305)

〈ある独特の志向的媒体がそこにある。それは、他のいかなる志向性をも形式と内容にそくして言わば反映し、独自の色づけをして模写し、そのさいこの志向性のなかに「概念性」というそれ〔表現〕自身が持つ形式を画きこむ。〉(ibid.)

〈表現の層は——そのことがこの層の独自性なのだが——それが他のすべての志向的なものに表現を賦与するということを除けば、非生産的である。あるいはこう言いたければ、その生産性、そのノエマ的作業は、表現することと、そのことにともなってあらたに入りこんでくる概念的なものという形式に尽きる。〉(ibid., S. 306)

「非生産的」即「単なる反映」であれば、表現されるものの非理念性がそっくり表現に反映するのは当然であろう。しかし問題はいかに反映するか、非生産性とは何か、ということである。それゆえ、鏡像とか模写という比喩に対する慎重な理解が、ただちに要求されるのである。(ibid., S. 305) そもそも表現は本質的に不完全であり、それはまさに表現の普遍性、概念性のゆえである。〈表現の本質に属する普遍性には、表現されるもののすべての特殊性が表現のなかに反映することは決してありえない、という意味が含まれている。意味する層は、一種の、基層の二重化などではないし、原理上からしてそうではない。〉(ibid., S. 310) ロゴス化し、概念化し、普遍化することなしに表現することはありえない。また逆でもある。表現の非生産性とは、表現が何も生産しないことを意味しない。すべての作用は、根源的生産において生成する。それは、〈いわば創造的端初という自発性の様態〉(ibid., S. 300)において始まる。表現もまた単なる再生産ではなく、それ自身一種の根源的生産、創造である。それはまさに〈Bedeutung〉を生産し、創造する。他のすべての志向性をロゴス化し、概念化し、普遍化し、範疇的形式によって総合する。つまり表現する。そ

してそれに《尽きる》のであり、それ以外のものは《生産しない》のである。知覚表現は知覚に表現を与える（範疇的に形成する）が、当の知覚そのものを決して生産しない。ましてや別の知覚を生産するわけでもない。表現だけから知覚をうることは決してできない。また、想起という意味で知覚を再生産するわけではない。想起のきっかけになりえない表現が、それゆえに不完全であるわけではない。表現は表現以外の何ものでもなく、表現独自の生産性を持つ。

たしかに、『イデー I』では、表現のこの生産性、概念化、範疇的形成の作業そのものは主題となっていない。しかしそれは、『論研』全体がこのことをすでになしていたことを前提しているからである。意味（Bedeutung）はイデア的単一体であり、普遍的対象ないしスベチエス的一种である。知覚表現の志向する意味に合致する充実する意味も、充実する直観としての知覚そのものの統握意味ではなく、範疇的に形成された知覚の意味的なもの（Bedeutungsmäßige）、つまりイデーである。そして、この普遍的対象そのものを思念する普遍性意識が明らかに存在するかぎり、直観概念は感性的直観から範疇的直観にまで拡張されなければならない。しかしこの拡張は、同時にそれぞれの直観の限定でもある。『論研』の主題は、表現と表現されるものの差異、前者による後者の概念化、範疇的形成、普遍化、つまり「表現する」とは何か、を解明することにあつた。

「表現される」ことは、同時に「思考される」ことである。（Ideen I, S. 304）表現されることによって高まってゆくロゴスの世界とは、言表、思考、思考されたもの、理性の世界である。（F. T. L., S.23）思考とは、《表現された Sinn になるべきはずの Sinn —— そしてこの Sinn は、表現された時には、表現の Bedeutung、とくにそのつどの言表の Bedeutung と呼ばれる —— が、そのなかで意識的に構成されるすべての体験》（ibid., S. 27）を意味する。このような思考、＜Bedeutung＞になるべき＜Sinn＞の意識的構成は、次のことを前提する。ひたむきに遂行されているすべてのコギトにとって、そのコギタトゥムそのものへの態度変更が可能であり、この反省によって当該の＜Sinn＞、思念されたそのもの、コギタトゥムそのものが措定されうる。ロゴス（思考、表現、理性）が可能であるためには、つまり、理性の《「批判」が始まるべきなら、そのつどの＜Sinn＞が主観的にならなくてはならない。》（ibid. S. 141）

知覚対象の同一性と意味の同一性

知覚において、物の諸規定は決して一挙に全面的に与えられることがない。しかし、物は無数の個別的規定の単なる総和ではない。同様に連続的知覚もまた部分的志向の単なる総和ではなく、統一体である。そして、《この統一はたしかに同一化の統一（Einheit der Identifizierung）である》が、《しかし同一化の統一とは》《ひとつの同一化「作用」の統一（Einheit eines Aktes der Identifizierung）と同じことを意味しない。ひとつの作用は何ものかを思念する。同一化作用は同一性を思念し、それを表象する。われわれの場合にはたしかに同一化が遂行されているが、いかなる同一性も思念されていない。》（L. U. II/II, S. 150）つまり、《いま知覚されているものと、さきに知覚されたものが、一つの同じものである》ことは、連続性（融合）の統一を土台とする新しい同一性の意識においてはじめて意識されるものである。（ibid., S. 151）

したがって、ノエマの意味において、意味規定が移り変っても《同一なもの》、《あらゆる述語を抽象した純粋な X》（Ideen I, S. 321）の同一性も、無限に多様な意味規定のそのつどの不完全な総合によってはじめて与えられ、それゆえに抹消される可能性を秘めた同一性ではない。それは逆に、何かについての経験が成立しうるための必然的な条件である。この《同一なもの》があつてはじめて、無限に多様な意味規定が可能になるのである。つまり、このことは、そのつどの意味規定が絶対的であることを意味しない。

たとえば、思い違いの現象について考えてみよう。私に、当初は「人間」だと思われたものが、そのものについての新しい経験が加ることによって、実は「人形」であったとしよう。その時、否定されたのは、意味規定の恒常性であつて、意味規定の基体の同一性ではない。この基体が同一のものであるかぎりでのみ、思い違いが生じうるのである。この基体の同一性は、そのつどの意味規定の集合を比較し、共通の意味規定を見いだすことによってじめて意識されるのではなく、知覚の連続性による統一である。意味規定の集合の比較は、中断された知覚において、基体の同一性を確認しようとする時になされる新しい同一化の作用である。

同一の基体なしに、知覚の無限な開放性について語っても何の意味もない。なぜなら、そのような知覚に

においては何事も起りうるからである。円いものの知覚は、四角いものの知覚が後続することを矛盾律によって排除しない。見えたものが瞬時に見えなくなり、円いものが瞬時に四角くなることに何の不思議もない。連続する諸知覚はそのことによって何の矛盾もきたさず、一つの全体知覚のうちに融合され、統一されているだろう。

さらに次のことを確認することができる。すなわち、ある同一の基体の意味規定が無限に多くなりうること、またそのつどの概括の意味規定が抹消されうることは、意味規定そのものが流動することを意味しない。たとえば、同一の基体が、当初は「人間」という意味規定を与えられ、今は「人形」という意味規定を与えられているとしても、「人間」という概念が「人形」という概念に変わったのではない。知覚という前表現層において、表現層の意味の同一性を論ずるのは不適切であると批難されるかも知れない。実は、たしかに不適切だということを、われわれは示したいと思っているのである。つまり、〈Bedeutung〉の同一性を主張することは、ある個体あるいは世界の認識が決して完結しないことと、何ら矛盾しない、と言っているのである。ナポレオンは、ある時は、イエナの戦いで勝利をおさめたが、後には、ワーテルローで敗れさったのだから、ナポレオンのある一定の状態を特権化した「イエナの勝者」という表現の意味も流動するのだ、などということがどうして主張できようか。

自己現在化と自己共同化

「あらゆるものが表現可能である」こと、そして同時に、「何故あらゆるものが表現可能であるのか」を明らかにすることに、現象学の主要な課題があった。あらゆるものは、有意味な陳述の主語になりうるかぎり対象（客観）であり、対象（客観）であるかぎりで表現可能である。（客観的理性の無限界性）それゆえ、現象学はなによりも、客観化作用（objektivierender Akt）の解明をめざす。《志向的体験はすべて客観化作用であるか、もしくはそのような作用を「基礎」にもつ》、《すべての質料は客観化作用の質料である。》（L. U. II/L, S. 493-4）そして、表現それ自体も客観化作用である。

ところで、あらゆる対象（客観）は、実在的、つまり時間的に局在化可能であるか、実在的でない、つまり時間的に局在化不可能であるか、いずれかである。前者は、その時間的局在性のゆえに、意識から独立な超越者であり、これに対し、後者は、思考の自発性に依存する。この構成の過程が「理念化」であり、それによって構成される非実在の対象は理念的对象と呼ばれる。表現の意味もまた、客観的時間の中にその位置を占めないという意味で、非実在的理念的对象である。「理念性」とは、まずはこの「無時間性」「超時間性」以外の何事も意味しない。あらゆるものの表現可能性を説く現象学は、それゆえ、理念的对象を構成するこの「理念化」の解明をめざす。

しかし、あらゆる対象構成が時間化であるならば、時間のなかに位置を占めない理念的对象の構成は、矛盾である。それゆえ現象学は、時間的に局在化不可能なものの或る独自の時間化を明らかにしなければならない。すなわち、理念的对象の無時間性、超時間性は、それ自身時間性の一様態にすぎない「汎時間性」（Allzeitlichkeit）（E. U., S. 313）である。誰にとっても、何処にも存在し、しかも同時に、特定の誰にも、特定の何処にも存在しないこの汎時間的对象の構成は、そのつど各人がそれであり、同時に特定の誰でもなく、特定の此処と今に在るわけでもない構成者、超越論的自我（transzendentes Ich）のうちにその根柢を持つ。

この超越論的自我が何であるかを解明することが、つねに現象学の中心課題であった。

Held は、フッサールの未刊の草稿を駆使しながら、この問題に次のような解明を与えている。すなわち、すべての対象構成は時間化（Zeitigung）であり、《この時間化の現様態は「現在化（Gegenwärtigung）」である。》（Held, S. VIII）《時間化の原階層は》、自己自身へのその最大の近さのゆえに、《超越論的自我の自己現在化である。》この自己現在化の《「場」が「生ける現在（lebendige Gegenwart）」である。》構成されるあらゆる対象は、時間的な流れゆく対象か、あるいは汎時間的な立ちつくす対象か、そのいずれかとしてしか構成されえない。同様に、対象構成の原様態、原階層の場である超越論的自我自身、時間的に流れゆく今か、あるいは汎時間的に立ちつくす今（nunc stans）か、そのいずれかとしてしか、自己自身を反省的表現性（明確性）において把握しえない。《すなわちつねにすでにいずれかの仕方でも構成されているも

のとして現象するのであり、最終的に構成するものとしては決して現象しない。》(ibid., X) だが、生ける現在そのものは、流れゆく今でも立ちつくす今でもなく、両者の統一、「流れゆき-立ちつくす-今 (strömend – stehendes – Jetzt)」である。それは、時間のなかにあるという意味でも、汎時間的という意味でも「時間的」ではなく、「前-時間 (Vor – Zeit)」(ibid., S. 116) である。あらゆる対象構成が時間化であるかぎり、前-時間的な生ける現在そのものはいかなる意味でも対象ではなく、それゆえ証示不能、表現不能、無名 (anonym) なものである。それはいかなる意味でも存在ではなく、「前-存在 (Vor – Sein)」(ibid.) である。

われわれはここに、あらゆる構成可能性、表現可能性の根拠そのものの構成不可能性、表現不可能性、無名性という逆説に曹偶する。すなわち、《すべてのものはその名前をもっている、ないしは最も広い意味で名づけられるもの、すなわち、言語的に表現しうるものである》(krisis., S. 370) と同時に、根源的時間構成の流れ、絶対的主観性、《こういったことのすべてを言い表わす名前をわれわれは持ちあわせていない》(Z. B., S. 75) のである。

しかし、まさにこの無名性のゆえに、現在化の原階層たる自己現在化は、同時に自己共同化 (Selbstvergemeinschaftung) でもある。それは、客観的世界、《すべての人にとっての世界、「だれもが」世界地平としてもつ世界》(krisis., S. 370)、語りつつ理解しあう人間の世界としての言語共同体、を構成する共同化の原階層である。なぜなら、《私を定義し他のあらゆる現前を条件づける私自身への現在 (Urpräsenz) が同時に非現在化 (Entgegenwärtigung) である》(Merleau-Ponty, P. 417) からであり、自己現在化が《生ける現在 — これは自らを投射し自らを弁証法的に把持する — の絶対的同一性のなかでの構成された契機と構成する契機の限らない不・一致と相互的包含との統一》(Derrida, p. 159) だからである。自己現在化は超越論的自我のそれ自身に対する最大の近さのゆえに、あらゆる現在化の原階層であった。しかし、最大の近さは最小の遠さにすぎない。自己現在化は、それ以前に自我が前反省的、原受動的に自己から引き裂かれ、距離をとっていたのでなければ、そしてその自己疎外 (Selbstentfremdung) と同時に、自己自身と絶えず連結していたのでなければ不可能である。しかもこの結合は、あらゆる能動的な自己同一化以前の根源的な総合、「移行の総合 (Übergangssyntheseis)」である。(Held, S. 104, Merleau-Ponty, p. 480, P. 484) 知覚における融合の統一も、あらゆる対象構成、あらゆる時間化、超越論的自我の反省的自己現在化も、滑り去らせつつ同時に引き留めるこの移行の総合なしにはありえない。《絶対者は移行である (l'Absolut est le Passage)》(Derrida, P. 165) と言われるのも、この意味においてである。

この原受動的な移行の総合によって私は、「現に (Da)」 「私が作動している (Ich fungiere)」 ことを知っているとはいえ、それは時間的なないし汎時間的に構成された「対面 (Gegenüber)」 ではない。それは何であるかを語れない「原事実 (Urfaktum)」 である。(Held, S. 146-9)

《私の主観性と私の他者への超越とを同時に基礎づけている中心的現象は、私が私自身に与えられているという、まさしくその点にある。》(Merleau-Ponty, P. 413) この与えられているということは、無名かつ事実的に、あらゆる対象化以前につねにすでに与えられていることであり、それゆえ、《私は私よりももっと私自身であるこの私に関して無知である。》(ibid., P. 412) 私は私の「私は作動している」を、他者の「私は作動している」より以上に現在化し、それが何であるかを知っているわけではない。たとえ《私が私の生の「第一人称【最初的人格】」であり、またあり続けるかぎり、私の、私に-とつての-存在が、他者の、私に-とつての-存在よりも本質的に近い》(Held, S. 164) としても事情は変らない。それゆえ他者の「私は作動している」がこのようにあらかじめ与えられている仕方が《共同現在 (Mitgegenwart) と呼ばれ、あらゆる対象化から身をかわす共同化の根源形式であるなら》《無名かつ事実的なものとしての私自身の「私は作動している」を受け取ることも「自己共同化」》と呼ぶことができるだろう。(ibid.)

したがって、《自我の内面にはすでに「形式的な此処-其処-相関関係」が支配しており、それによって我(此処)は、「つねにすでに人称変化を可能にする汝(其処)」なのである。》(ibid., S. 169) もちろん、客観的に構成された自我の一人称単数性、その唯一性は、他の自我を排除する。しかし、最終的に構成する自我の唯一性、一点性は、もろく、崩れさる。それゆえに《われわれが絶対的個体としての密度を手に入れることを妨げる内的脆弱さ (faiblesse intérieure, innere Hinfälligkeit)》(Merleau-Ponty, P. 485) につい

て語ることができるのである。しかし、自我における「此处-其処」の相関も反省によって確定された複数性ではない。依然として自我は移行の綜合によって「私」として立ちつくす。《生ける作動現在に立ちつくし-崩れざる自己共同化である。》(Held. S. 172)

あらゆる客観的構成以前の、超越論的自我のこの無名の前所与性 (Vorgegebenheit) という「事実」をどう理解すべきだろうか。Merleau-Ponty によれば、これは《私がすでにある物理的・社会的世界のうちに位置づけられていること》《私の世界への挿入》に私が気づいていること、それが《私に隠されていないこと》(Merleau-Ponty, P. 413) である。《私の主観性は》、決して客観的世界に属するものではない《己れの身体を引きずっている》(ibid., P. 405) ことによって、《その純粋性と透明性を失う。》(ibid., P. 402) つまり《われわれの誕生》《われわれの「生殖性」が、われわれの能動性ないし個性性と、われわれの受動性ないし一般性》《とを同時に基礎づけているのである。》(ibid., P. 489) しかし、原事実としての自我の不透明性を、身体の不透明性によって基礎づけることができるだろうか。そうだとすれば、それはもはや原事実ではないことにならないだろうか。逆に、身体の不透明性も、《身体が客観的世界から身を退く》(ibid., P. 402) ことができるのも、生ける現在が「流れゆき-立ちつくす-今」という両義性をそれ自身でになっているからではないだろうか。この両義性は還元の果てに、もう一度自我を世界へ挿入することによって生じるのではなく、まさに還元の果てに見い出される両義性である。それゆえにこそ、私は身体を「持つ」ばかりでなく、身体「である」と言えるのである。

結論

この論文の前半は、そこではそれと明示されていないが、加茂英臣氏の論文「意味と存在」(哲学誌)の再考である。その論文の意図は次のようである。《さて、この『論研』で主張された意味一般のイデア性が、……『イデーン I』でのこの「意味」概念の前表現層までの拡大及び分析によって、その高貴な資格の保持を貫徹できなくなっていると、筆者は考える。つまり、表現意味のイデア性は、知覚意味の非イデア性によって、自らを維持できなくなっているのではないか、少なくとも、知覚意味の非イデア性が、『論研』で表現意味に与えられたあの透明なイデアの姿に、暗い影を投影してくることは事実である。果して、表現意味は、この影を拭い去って、自らの形相 (Specie) を保てるか。『論研』と『イデーン I』の枠組にとどまるかぎり、恐らくは出来ないのではないかと、筆者は考える。つまり、イデア的意味-個体という二極的枠組では、ことたりなくなっている筈なのである。》(哲学誌 P. 61-2)

われわれは、著者の議論を十分理解せず、『論研』と『イデーン I』の枠組という制限を尊重しなかったかもしれないことを恐れながら、《「意味」概念の拡大》については、<Sinn>の拡張はあっても、<Bedeutung>の拡張はなかったことを確認した。ついで、意味の理念性と流動性の対決が、客観的理性の無限界性と意味志向の同一性の確保の主張によって果されていたのを見た。また、表現と表現されるものの関係が、決して単なる反映ではなく、表現の生産性が、普遍化、理念化の作業に認められ、それに尽きることが示めされた。そして、知覚対象の同一性が融合の統一であり、それこそが、《差異的綜合》(哲学誌 P. 66)と呼ばれていたものの原形式であること、個体の意味規定が未完であるとしても、その意味規定そのものは、表現されうるかぎり、流動するものではないことが確認された。

結論的に次のように言うことができる。意味の理念性の主張は、われわれの言語活動において、同じ語、同じ文が、つねに明証的直観に基づいて同じ意味で理解されていることを意味しない。そもそも、汎時間性 (Allzeitlichkeit) が時間性 (Zeitlichkeit) の一様態であることは、それが、「はかなさ」(Zeitlichkeit) の一様態であることを意味する。現象学の論理的客観主義について語りうるとしても、それは、表現の意味の理念的同一性が、自覚 (Selbstbesinnung) と自己責任 (Selbstverantwortung) に基づく意味志向の同一性の確保によってはじめて成立しうることを意味するにすぎない。それゆえにこそ、語っているのは誰であり、何を語っているかについての不断の反省が要請されるのである。

この論文の後半は、この語っている自己は誰か、語るとはどういうことなのか、という問いに当てられて

いる。

現象学の課題は、なぜすべてのものが表現可能であるかを解明することにある。まずこのことが確認され

た。すべてのものは対象として構成されているかぎりでは表現可能であった。そして、すべての対象構成が時間化であることが示された。何時でも出逢いうる汎現在性という時間様態のうちで与えられる理念的对象の構成は、流れゆきながらつねに今という形式を保持し、汎時間的に現在する自我なしには不可能である。しかし、われわれはそこで解き難い謎に曹偶した。すなわち、あらゆる対象構成をのがれる超越論的自我そのものの無名性という事実である。だが、それは事実であるかぎり自分自身に与えられている。最小のへだたりとその架橋、移行の総合という仕方での自己と自己の連結は、無名かつ事実的な自己共同化と捉えられた。それこそが、表現可能な世界、客観的世界、言語共同体を構成する共同化、相互主観性の原形式である。

文献略号

L. U. II/I : Logische Untersuchungen, Band II, Teil I, Max Niemeyer, 1968.

L. U. II/II : Logische Untersuchungen, Band II, Teil II, Max Niemeyer, 1968.

E. U. : Erfahrung und Urteil, Clssen, 1964.

Ideen I : Ideen zu einer Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie, Erstes Buch, Hu. (Husserliana) III, 1950.

Z. B. : Zur Phänomenologie des inneren Zeitbewußtseins, Hu. X, 1966.

F. T. L. : Formale und transzendente Logik, Hu. XVII, 1974.

Krisis : Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie, Hu. VI, 1962.

以上 Husserl.

Ricoeur : Idées directrices pour une phénoménologie, (Ideen I, traduit par Ricoeur) Gallimard, 1950.

Held : Lebendige Gegenwart, Phänomenologica 23. 1966.

Merleau-ponty : Phénoménologie de la perception. Gallimard, 1945.

Derrida : L'origine de la Géométrie, (Husserl : Ursprung der Geometrie, traduction et introduction par Derrida)

哲学誌 : 『哲学誌19』, 東京都立大学哲学会, 1976.

(昭和52年12月3日受理)